

カミキタナタネの栽培特性

藤田 正男・小林 渡*・外川 真稔**・熊谷 憲治・竹村 達男***

(青森県畑作園芸試験場・*青森県農業試験場砂丘分場・
青森県平賀地区農業改良普及所・*青森県農業試験場)

Cultivation Characteristics of Winter Rape Variety 'Kamikitanatane'
Masao FUJITA, Wataru KOBAYASHI*, Masatoshi SOTOKAWA**,
Kenji KUMAGAI and Tatsuo TAKEMURA***

(Aomori Field Crops and Horticultural Experiment Station・*Sand Dune
Branch, Aomori Agricultural Experiment Station・**Hiraka Agricultural
Extension Service Station・***Aomori Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

農林水産省東北農業試験場が育成した「カミキタナタネ」は短茎で倒伏し難く機械収穫適応性が優れており、「トワダナタネ」「青森1号」より多収・高品質で、収量の年次変動が少ないため、1986年度に本県の奨励品種に採用した。

1983年から4か年、「カミキタナタネ」の播種期・播種様式・播種量・窒素施肥量について検討したのでその概要を報告する

2 試験方法

(1) 試験区の構成 (表1~3)

表1 1984年試験区の構成

区 番	①標	2	3	4	5	6	7	8
播種期(月日)	9.7				9.17			
栽植密度(本/㎡)	28.6		86.6		28.6		86.6	
基肥窒素(kg/a)	0.8	1.2	0.8	1.2	0.8	1.2	0.8	1.2

表2 播種様式・播種量に関する試験区の構成('85, '86)

播種様式	播種量(g/a)	15	20	25	30	35	45	55
全面散播						○	標	○
ドリル播き(条間30cm)		○	●	○	●	○		

注: ●は1986年のみ

表3 1985年試験区の構成(窒素施肥量に関する試験)

抽苔期追肥	基肥(kg/a)	0.6	0.8	1.0
0.2			○	○
0.4		○	標	○

(2) 播種期

1983年: ①9月2日(標播), ②9月14日(晩播)
1985年: 播種様式・播種量に関する試験 9月5日
" : 窒素施肥量に関する試験 9月6日
1986年: 9月2日

(3) 栽植様式

畦幅70cm, 株間10cm, 2条植え(1983年, 1984年標

植, 1985年窒素施肥量に関する試験)

畦幅35cm, 株間3.3cm, 1条植え(1984年密植)

(4) 施肥量(kg/a)

1983年: N 0.6+0.2, P₂O₅ 0.6, K₂O 0.6

1984年: N 0.2(追肥), P₂O₅ 1.2, K₂O 1.1

1985年

播種様式・播種量に関する試験: N 0.8+0.4, P₂O₅ 1.2, K₂O 1.1

窒素施肥量に関する試験: P₂O₅ 1.2, K₂O 1.1

1986年: N 0.4+0.2, P₂O₅ 0.6, K₂O 0.5

3 試験結果及び考察

(1) 播種期と生育・収量

1983年は9月2日播きで全英数・一英粒数が優り, 9月14日播きに比べ子実重が15%多かった(表4)。

1984年は9月7日播きが越冬株率・全重・一英粒数が優り, 多収となった(表4)。

以上の結果, 越冬前生育を確保し越冬性を高め, 多収を得るためには9月上旬播種が必要と考えられた。

(2) 播種様式・播種量と生育・収量

1985年はドリル播きでは播種量が多いほど㎡当り英数が優り, 多収となった。全面散播では播種量の多少による収量差は少なかったが, 35g/a播種区が多収になった(表5)。

1986年は全面散播では㎡当り英数・㎡当り粒数・子実重は播種量による差は判然としなかった。ドリル播きでは㎡当り英数が播種量増に伴い増加したが, ㎡当り粒数・子実重は30g/a播種で頭打ちとなった(表5)。

以上の結果, 適播種量は全面散播では35~45g/a(千粒重4.5gで77.8~100粒/㎡), ドリル播きでは30~35g/a(同66.7~77.8粒/㎡)と考えられた。

(3) 窒素施肥量と生育・収量

1984年は, 基肥窒素0.8kg/a区が菌核病罹病株率が低く, 成熟期の全英数・一英粒数が多く, 多収を示した(表4)。

表4 播種期・栽植密度・基肥窒素量と生育・収量 (1983, 1984年)

年次	区番	越冬前乾物重 (g/株)	越冬株率 (%)	菌核病罹病株率 (%)	全英数 (英)	一英粒数 (粒)	全重 (kg/a)	子実重 (kg/a)	子実重標準比 (%)
1983	①標	—	75.7	11.6	227	26	111.7	32.9	(100)
	2	—	74.2	1.7	200	20	99.5	27.9	85
1984	①標	11.8	84.4	1.8	251	29	116.9	38.3	(100)
	2	16.2	87.7	7.4	256	26	109.5	38.0	99
	3	6.5	81.7	1.6	153	29	125.9	40.2	105
	4	11.5	81.1	1.7	118	26	121.9	39.8	104
	5	5.1	76.5	1.7	267	27	105.7	36.0	94
	6	5.5	80.1	7.0	247	25	103.1	33.5	87
	7	4.3	81.7	1.7	178	24	109.2	37.8	99
	8	4.4	78.9	2.7	173	24	107.1	35.6	93

表5 播種様式・播種量と生育・収量 (1985, 1986年)

年次	播種様式	播種量 (g/a)	発芽率 (%)	成熟期 立毛本数 (本/m ²)	m ² 当り 英数 (英)	m ² 当り 粒数 (×10 ² 粒)	子実重 (kg/a)	子実重 標準比 (%)
1985	全面散播	35	31.7	—	4292	1125	28.1	108
		45標	30.3	—	4518	1075	26.1	(100)
		55	27.9	—	5076	1117	27.2	104
	ドリル播	15	81.2	—	4931	1203	30.1	115
		25	80.4	—	5385	1255	32.4	125
		35	80.4	—	5623	1338	35.1	134
1986	全面散播	35	86.8	58.5	6897	1283	36.8	99
		45標	85.5	66.5	6091	1243	37.3	(100)
		55	82.8	79.8	6631	1200	36.5	98
	ドリル播	15	100	34.3	5231	1109	33.3	89
		20	99.3	42.4	5440	1137	34.4	92
		25	100	48.8	5568	1158	34.1	91
		30	100	55.4	6194	1245	35.2	94
		35	100	55.9	6306	1236	35.3	95

表6 窒素施肥量と生育・収量 (1985年)

窒素施肥量 (kg/a)	越冬前乾物重 (g/株)	開花期乾物重 (g/株)	菌核病罹病株率 (%)	全英数 (英)	一英粒数 (粒)	子実重 (kg/a)	子実重標準比 (%)
0.6 + 0.4	9.8	15.8	12.3	174.7	23	29.4	94
0.8 + 0.2	11.5	14.9	13.8	184.4	26	31.4	100
0.8 + 0.4 標	10.2	21.9	7.9	183.2	27	31.5	(100)
1.0 + 0.2	16.5	23.6	10.8	198.3	27	34.4	109
1.0 + 0.4	17.1	27.5	12.9	219.5	25	34.8	110

1985年は、越冬前生育・開花期生育・成熟期の全英数が基肥窒素量が多いほど優り、子実重は基肥窒素量1.0>0.8 0.6 kg/aとなった。また、追肥窒素0.4 kg/a区での増収効果は認められなかった(表6)。

以上の結果、基肥窒素量は0.8~1.0 kg/a、追肥窒素量は0.2 kg/aが基準と考えられた。

4 ま と め

カミキタナタネの播種適期は9月上旬。適播種量は全面散播で35~45 g/a、ドリル播き(条間30cm)で30~35 g/a。窒素施肥量は基肥に0.8~1.0 kg/a、抽苔期(4月下旬)の追肥に0.2 kg/aが適していると考えられた。